

## バッハと一緒に楽しみましょう(2)

### バッハの作曲技法を知る

橋本 眞行(副指揮者)

一般的に言って、作曲者がどのような思いや意図のもとで音楽を書いたかを知ることが、演奏者にとってたいへん重要で、その理解が深まるほど演奏が雄弁となり、説得力が加わると思います。とくに声楽もしくは合唱作品は、テキスト(歌詞)があるため、その内容・メッセージがどのように音楽化されているかをより具体的に捉えることができ、聴衆やわれわれ合唱団の一般団員にも比較的容易に理解できます。

バッハの場合にはさらに、残存する 250 曲ものカンタータ・モテット・受難曲などから、体系的に把握できる音楽語法を用いて作曲されていることが、われわれの理解をより確かなものにしてくれるのです。『月報』で大村先生の楽曲解説を読んでいらっしゃる、東京バッハ合唱団のメンバーには申し上げる必要もないかもしれませんが、今回はそのことをどう理解し、歌手としてどう音楽に接するのかということ論じてみたいと思います。

いまいちど、バッハがどのような技法でメッセージを持つ音楽を書いたかを、かいつまんで見てみましょう。第一はマドリガリズムという、言葉を音形に変える手法です。この手法は言葉を直接音型に変える方法で、波、水流、涙、地震、鐘、ノック、発光などの絵画的情景描写と、歩み、騒ぎ・戦い、疲れ、驚き、追従等の動作をあらわす象徴的表現、そして喜び、希望、苦しみ、痛み、嘆きなどの感情をあらわす象徴的表現などがあります。

第二は特定の楽曲形態を導入し、作曲目的やテキストの意義を示す象徴表現です。この手法の例は、その時節のコラールを数多く導入したクリスマス・オラトリオや受難曲、ただ一つのコラールを用いて作曲したコラール・カンタータ、来臨(イエスの入城)の場面を表現するために用いられるフランス風序曲の導入な

どに見られます。

第三は楽器による象徴機能です。とくに管楽器の音響的特色が、楽曲の用途、テキストの意味合いや情景などを強く印象づけています。たとえば、トランペットは荘重・荘厳な曲でファンファーレとして、また軽快な喜びの象徴として用いられ、受難曲では用いられません。オーボエ・ダモーレはその名の如く(愛のオーボエ)愛をテーマにした、しかし、どちらかという愛や厚い友情の失われる不安や嘆きを歌う曲で用いられる、といった具合です。

そして第四には、賛否両論はありますが、数の象徴です。これまで皆さんは、3(三位一体)、10(十戒)、12(十二使徒)、14(BACH=順序数の合計)、41(J.S.BACH=順序数の合計)などの意味はよくご存知と思います。

その他、調性や和声進行、そしてまた歌手パートの選択にも意味があります。喜びの歌は二長調、迷える魂はソプラノ、主やイエスはバスの役割であることなどです。また、パロディについても、教会カンタータから世俗曲に転用された例はないことを、われわれは知っています。このこともバッハの真摯な作曲姿勢を示す事例として理解すべきで

しょう。

音に表れない作曲技法(?)もあります。マタイ受難曲のスコア(「げに、こは神の子なりき」)では、楽譜の上で十字をきっているのです。これはオリジナルのスコアを見ないと解らないのですが、バッハの信仰心の厚さと作曲の姿勢を感じさせてくれる一例です。さらに、「(バッハは)新しいものの端緒ではなくて、一つの終局だった」、「バロック音楽の総合者」、「全てがバッハに流れ込んだ」などの評価にも表れているように、バッハは、ドイツはもとより音楽先進国であった



イタリア・フランスの音楽も吸収して、それまでの世界中（と言ってもよいでしょう）の作曲技法を習得していたことも重要なポイントです。

以上、非常に簡単にみてきましたが、バッハを聞くとき、ドイツ語の歌詞の意味が直接的に解らなくても、音楽からおおよそのメッセージが感じられる経験をされた方も多いと思いますが、それは上記のようなバッハの多種多様な、また細心かつ的確な＜翻訳＞によってもたらされているものなのです。テキストのどの言葉に光を当てて音楽化し、全体を論理的に表現すれば、聴衆の心に正しく響くのかということをも十分解って作曲しているようにもみえるので、バッハは心理学の大家かも知れません。このことから、バッハは、われわれ聴衆（信徒）がテキストの意味するところや意義、また説教の内容を十分に理解できるよう、ありとあらゆる手段を用いて作曲したのだ、ということができるのではないのでしょうか。視点を変えていうと、バッハの作品のなかには、数多くバッハの深い配慮が隠されており、われわれ歌い手・聞き手からすると、珠玉の宝物がちりばめられていると理解できるのです。

バッハを演奏するわれわれには、それこそ宝捜しの楽しみがあるのです。合唱部分だけでなく（合唱部分だけでも、4声がどうなっているかを知ることは大変なことですが）、器楽や通奏低音など全体を見渡し、どういう宝物が埋められているか探してみましょう。少し勉強が必要かも知れませんが、また違った歌う楽しみができること請け合いです。バッハが心血を注いだ、またはバッハの全能力を駆使して作曲した作品をまえに、また真の職人たるバッハが、どの仕事にも手を抜くことはしなかったと信じて、安心してバッハワールドを楽しみましょう。ただし、その＜宝物＞は皆さんの人生を豊かにしてくれますが絶対にお金にはなりませんから、決して自分一人のものにしないで周りの人に教えてあげましょう。

以上のことを踏まえたとき、じつは、演奏者としてのわれわれには重い試練が待っていることもお伝えしなければなりません。深いメッセージを伝えたいと願い作曲したバッハの思いに対して、われわれの演奏は、果たして適確にそのメッセージを伝えているか、という点です。技術的な観点からすると、音程・和声・リズム・曲（対位法）の構造等について、バッハが意図した表現になっているかをチェックしてみる必要があります。しかしもっと重要で、聞いてくださる方と感動を共にできるのは、メンバーの一人一人が自信をもって、もしくは心から楽しんで、生き生きと歌うことです。皆さんがバッハ愛好家の域を越えていることは疑いもないことですが、自ら楽しむ域になっているか、いちど考えてみませんか？ ■

## 私はアメリカのイラク侵略に なぜ反対し闘うか(1)

森井 眞（団友）

以下の文章は、アメリカ軍のイラク侵略が開始される直前2003年3月13日に都内で行なわれた、「報復戦争に反対する会」主催第1回ピーストークでの講演記録であり、同会機関紙『ジャキューズ! - J' accuse!』2003年8月1日発行号に掲載されたものです。

講演から半年を経過しました。しかしながら、ご存知のとおり事態はその後最悪の展開を示しつつあり、現在および今後にごそ、大いに耳を傾けるべき内容だと思われます。筆者と発行者の了解を得て、今回より4回に分けて転載させていただきます。

森井氏には、1992年半年にわたり『「口短調ミサ曲」はどう歌われ、どう聴かれるか』と題する連続講演をしていただきました。フランス宗教改革史専攻の歴史家、元明治学院大学学長。

帝国主義の時代に戻ることは許されない

私は、たぶんジャック・シラクとはいずれ袂（たもと）を分かつことになると思うんですけども、今のところはまったくシラクの言うとおりでと思います。

ブッシュという人はイラクの現実を正確に認識しようとか、真実を知ろうなんていう気はそもそも無いんだと思います。そして、もっぱら相手に難癖を付けて何とかして戦争を仕かけたい、中東をアメリカの支配下におきたいと考えているんだと思います。

戦争の理由としてアメリカが言っていることは、私はすべてデッチ上げだと思います。ちょっと前置きみたいになりますが、このあいだ「朝日新聞」に、これは政治家ではなくて学者といわれる人が「イラクは10回以上も国連決議に背いていることが明らかになったから、アメリカがイラクに戦争するのを私は理解する」と書いていました。国連決議に背いているのはイラクだけではありません。ご存じのように、イスラエルは30回以上やりました。国連決議に背くのは困るんですけども、それだから戦争をして良いとはならないのです。

それから、アメリカは「9・11」の事件にイラクが係わっていたと言いましたけど、結局証拠はあがりません。イラクはいま大量破壊兵器を放棄しつつあります。隠されていると言われているものもやっぱり見つかりません。

さらに「フセインは独裁者だ」と言う。ただ世界中に独裁者はフセイン以外にもたくさんいます。だいたい他国の体制を転覆させるのは明らかに国際法違反です。もろもろ考えてみますと、このアメリカの戦争はとても許されない。

私はそういう法の問題もさることながら、恐ろしいと思うのは、アメリカがいま軍事費として使っているお金が、軍事予算が世界の第2位の国から第15位の国

までの14カ国の軍事予算の総額を上回る。そんな途方もない莫大な軍事予算をつぎ込んでいることです。

これはどうでしょう。つまり物を壊し人を殺すためにこれだけのお金をつぎ込んでいる。14カ国が束になってもかなわないお金を使い、そして大量破壊兵器を研究し開発し製造しつつあるわけですね。

こんなものを持つとやっぱり使いたくなるわけなんです。アメリカはアメリカ人が死ぬことにはとても気を使いますが、それ以外の人がいくら死のうが、あるいは難民がいくら出ようが、そんなことはどうでもいいんで、これを使おうとしているというこの現実。この恐るべき犯罪行為をわれわれは黙って見過ごしていいのかという問題です。

しかも日本の政府は、アメリカのやることが理に適っているから理解するというのならいいんですけども、強い親分のやることだから理に適ってようがいまいがそんなことは別にして、とにかく理解してアメリカのケツにくっついて行こうとする。この情けなさ、卑しさ、醜さ、私は本当にこれは我慢できません。

今日の話の題は、「私はなぜアメリカのイラク侵略に反対するのか」です。これは与えられた題ですが、「なぜ反対するか」と言われれば、私はふたつ 客観的な外的視点とそれから主観的・内的あるいは個人的視点とに分けることができるかと思います。

はじめの、客観的な視点というのは、このあとの先生にお譲りして、ちょっとだけ触れさせていただきます。人類は農耕・牧畜の段階に入ってから今に至るまで戦争をくり返してきました。そしてついに帝国主義の段階に到達します。「帝国主義時代」といわれる19世紀の終わりから20世紀初めにかけてのあの時代です。

帝国主義という言葉には、当初は悪口めいた否定的な意味がまったくなかったようです。あの小さな島国から興って世界植民地帝国をつくった大英帝国のあり方を、うらやみあるいはあこがれ讃えるような意味だったようです。つまり、どちらかといえば誉め言葉に近かった。それが第1次大戦以後になると、悪口以外には使われなくなりました。

私は、あそこで歴史が変わったんだと思うんです。なぜでしょう。あの1917年のレーニンの『帝国主義論』という本があります。そしてそれに対してアメリカのウィルソン大統領が「民族自決」を唱えました。これらの主張を世界は無視することができなくなりました。

帝国主義というのは、強い国が力づくで他の民族を征服して、その地域に植民地をつくってそこに住んでいる人を支配する。これが当たり前のこと、別に悪いことではなくて、強けりゃそういうことをやるのは当然のこととして認められていたわけなんです。20世紀の初め、第1次大戦までは。

それが認められなくなりました。帝国主義は否定さ

れた。私はそう思います。

ところが今アメリカは、昔のように植民地をつくらうというのではないんですけど、価値の多様化・多元化・相対化がいわれているこの時代に、アメリカの価値を絶対視し絶対化して、これを力で人に押しつけようとしています。そして政治的・経済的あるいは文化的に他民族を支配しようとしています。この独善。この傲慢。子どもはこれを許してはならない。

再び人類が帝国主義の時代に戻る これは「新しい帝国主義」と言われますけど、他の民族の意志を無視して自分の意志を押しつけようとする、こんな時代に戻ることは絶対に許されてはならないと思います。

私は、帝国主義が否定されたのは次のようなことだったと思います。

第1次大戦というのは世界大戦といいましても戦場は主としてヨーロッパです。そこでは、戦争がこれまでのような軍隊と軍隊との戦いでなく、非戦闘員をまきこむ殺戮になってしまったのです。また戦争は文明が野蛮を征服する行為のように思われていたのが、今や文明と文明との戦い、文明が文明を破壊する戦いになってしまいました。このとき初めて勝者が敗者の立場に立って考えました。そして勝者が敗者の痛みを自分の痛みとして感じた以上、必ず敗者をうむ戦争をどうしてまたやることができるでしょう。

ヨーロッパでこれまでないような戦争を経験した人たちは、もしこんなことが再び起こったら人類は滅亡しかねないという強い危機感を抱きました。そしてこれからは戦争は絶対やってはいけない、戦争がない世界をつくらなければならないと願うようになったと思うのです。

昔から人類は反戦・平和の夢を抱きあるいは祈り、とくに宗教家や思想家はそれを考え説いてきました。でもそれは、おおむね個人的営みだったと思います。

ところがこの第1次大戦から反戦・平和の訴えは、歴史を変えるような政治的な動きになるんです。これは大きなことだと思います。とくに第2次大戦後、世界中で戦争反対を叫ぶ人が増えてきた。国家が影響を受けないわけにはいかないほどの声を。かつての第1次大戦前までのあの思想家たちの叫びとは質的にも量的にも違った叫びが、多くの人々の中から起こるようになった。

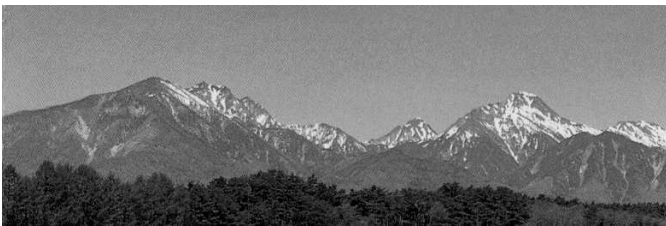
そして国家権力が、もう戦争のない世界をつくらうとして動き出したのです。もちろんその試みはたびたび挫折しました。たとえば第1次大戦後の国際連盟もそうです。それでも戦争がない世界をつくるために石を一つひとつ積み上げていこうとする努力がなされてきました。

そして第2次大戦後、国際連合ができました。国際連合というのはご存知のように、戦勝国である連合

が自分たちの都合のいいようにつくったものです。でも私が希望をもつのは、生きている間に2度も大きな戦争の被害を受けてきた、これから後につづく人がこんな目にあわないようにしようというあの国連憲章は、「われら連合国は」ではなくて、「われら連合国政府は」でもなくて、「われら連合国の人民は」なんですね。主語は「人民」なんです。私はここに期待をかけます。

私どもは現在の国連というものに幻想を抱いてはならないので、あの機関は欠点だらけでいろいろ問題を抱えています。そして現実には国連は国家権力の功利・打算・駆け引きによって動かされています。けれども、それを動かしている国家権力は、われわれ人民の叫びを無視して動けるんでしょうか。

私は、残念ながら、われわれは今はまだ国家権力を動かすだけの力をもっていないと思います。けれども、それでもなお、あの国家の代表者たちにわれわれの動きは影響を与えないではすまない。そしてもっと大きく彼らを動かすような力にわれわれの動きはなる。ほかでもない今日ここに集まっているこの小さな集會も、そういう全世界の人民の平和を求める動きの一つの働きだということ、そしてこれがいずれは国連に人民の意志が活かされるように変えられていく、その一つの営みだという思いを、われわれはもっているのだと私は思います。(つづく)



## 『嬉遊曲、鳴りやまず』

齋藤秀雄の生涯』(中丸美緒著)

大村恵美子

1974年9月に世を去った齋藤秀雄氏の伝記であるこの著書は、1997年に日本エッセイストクラブ賞その他を受賞した。2002年9月に新潮文庫に入れられたものを、この夏、読んだ。

齋藤秀雄氏の桐朋グループは、私の修学期間とほぼ平行して、生まれ育ち、世界に飛躍していったもので、私はその始めから細かい経過まで、たえず外側にいながら、ほとんど啞然とした思いで眺めてきた。

齋藤氏個人とは一面識もなく、多くの語り伝えによっても、私自身とはまったく対極的な生き方のように思われ、とくに近づきたいとも、桐朋関係のことを知ろうともしないできた。私は始めから、ごく当たり前のペースで生活をして、音楽に潤され、慰められ、は

げまされる、そういう人生を貫きたかった。幼時から組織的に教育をほどこされ、日に数時間以上も練習に専念し、レッスンで怒鳴られ叩かれ、テスト攻めコンクール攻めに追い立てられ、海外に挑戦してゆく、そういうエリートコースには、何の引力も感じなかった。

しかし、この著書で、おちついて胸襟を開いて彼とその周囲の詳細を知ると、やはりこれは大変な歴史だったのであり、おそるべき短期間に、私たちが日本でかなりの水準の西洋音楽を享受することができるようになったのは、このたったひとりの天才の出現によること多大だということ、つくづく思われる。文句なしに脱帽すべき偉業である。中丸美緒氏の記述も、200人もの関係者の証言や膨大な資料を、客観的に、たくみにこなして、真実に迫る。

これからは「サイトウ・キネン・オーケストラ」をはじめ齋藤氏の遺業の恩恵に積極的に浴して、わが国に起きた奇蹟を、人並みにたのしみたいという気持ちになった。それはそれとして、争いのきらいな私には「死にもの狂い」のような熱狂を、とりわけ音楽に求めたくない。スゴイ!という音楽体験を、なんとなく敬遠したくなる。そういう私だから、人間のあらゆるスゴさを、調和の衣に整えたバッハの、素人にも近づきやすいカンタータに、ひかれてきたのだろう。

そんな感慨をもちながら、実際に見聞きしてきた同代人たちが登場活躍するこの伝記を、まことに興味津々と読んだ。そして、その激烈なエリート人生を、最後の最後まで貫いて劇的に、今の私と同じ年齢で閉じた齋藤氏を仰ぎみるとともに、やがて何の変哲もなく穏やかに消えてゆく私の終りを予想して、安堵の気持ちをおぼえるのも事実である。

\* \* \*

追記 音楽の演奏と享受の仕方については、時代と共にそのあり方が変わってくる。19世紀に、コンサートホールで、中流層以上の市民たちを対象に演奏されたその頃の音楽が、これまでのいわゆるクラシック音楽の典型である。しかし20世紀ともなると、音楽創造に一般大衆も積極的に参加するようになり、演奏も演奏会場での限られた演奏家・聴衆による密接な体験にとどまらず、レコード・テレビ・映画などの手段によって、ひとつの演奏が、同時的にも恒常的にも、世界中の何千何万という人々と共体験できるようになった。

そのことを深く実感できたのが、最近見た映画「永遠のマリア・カラス」で、これからの芸術家の存在について、多くのことを考えさせられる。私たちのバッハ・カンタータ演奏も、40年以上続けてきて、かなり世に知られるようになったようだが、実際に聴いた人の数は、ごく限られていた。それが、今年からのCDの発行によって、全国的に聴いていただけるようになったのは、飛躍的なことではないだろうか。